ディアコニア

305

「信仰の父アブラハム」

創世記12章1～9節

伊藤瑞男

「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。…地上の全ての氏族はすべてあなたによって祝福に入る。』アブラムは主の言葉に従って旅立った。」

この言葉は、アブラム、すなわち、後に神さまによって改名されてアブラハムとなる彼が、神さまから受けた召命の言葉です。

この神さまの言葉は、アブラハムとその子孫が「大いなる国民」とされる、また、「地上の氏族はすべてこの民によって祝福に入る」という途方もなく壮大な約束です。アブラハムは、この言葉を信じて、旅立ちました。

この時、彼は、妻サラと甥のロトと数人の従者しかいない、羊や山羊など小動物を飼う小さな家族集団の家長にしかすぎません。さらに、アブラハム自身は既に75歳の老齢になっていました。

将来の展望など持ちえようもない彼が、どうして遠い未来に果たされる約束の言葉を信じることができたのでしょうか。また、そもそも神さまの言葉を聞くことがどうしてできたのでしょうか。

映画「屋根の上のヴァイオリン弾き」(19世紀ウクライナ在住のユダヤ人家族を描いている)の主人公・牛乳屋のテヴィエが神に祈る時、天に向かって顔を上げていたのを思い起こします。テヴィエの祈りの姿の原型はアブラハムにあるのではないかと、思います。

アブラハムは半砂漠地帯で遊牧生活をしながら、昼は太陽が照りつけ、風が吹き抜ける空を見上げながら、夜は満点の星空を仰ぎながら、しばしば祈ったのではないでしょうか。とりわけ、この地域の夜の星空は圧倒的な存在感をもって見る人に迫ります。そのような生活の中で、アブラハムは天地の造り主、全能の神さまを信じるようにされ、神さまの声を聞くという特別な恵みが与えられたのです。しかもいきなり、諸国民の「祝福の源となる」という運命的な言葉です。この約束は、創世記15章においても繰り返し告げられます。

アブラハムは、自分の子孫を偉大な民族にしてくださるとの神さまの約束を全く疑いなく信じたわけではありません。自分たち夫婦に子供が与えられそうもないので、従者の中の一人を自分たちの養子にしようとしていたのです。すると、神さまは言われます。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた、『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

アブラハムは、天の無数の星を見て、

偉大な天地の創造主である神さまならば、彼の子孫をこのように偉大にしてくださるのはいとたやすいことであると信じました。そして、彼は従者を養子にすることを止め、世継ぎの子が与えられるのを忍耐強く待ちました。

後に、使徒パウロは創世記15章6節に注目し、こう言いました。

「『それが彼の義と認められた』という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのでなく、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。」

（ローマ4：22～24）

わたしたちキリスト者の信仰は、イエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰によって義とされる（救われる）ということなのですが、それはアブラハムの信仰に始まりがあるというのです。それ故、アブラハムは私たちキリスト者の父となり、多くの民の父となった、とパウロは言います。

しかし、アブラハム自身はもちろんイエス・キリストのことを知りませんし、世界の諸民族のことも知りません。それなのに、どうして彼の信仰がキリストを信じる信仰による救いにつながるのでしょうか。どうして、世界の諸国民の祝福につながるのでしょうか。

アブラハム自身の中に、主キリストにつながるものがあるのではなく、それは神さまの中にあるのです。世界の民への祝福もアブラハムの中であるのではなく、神さまの中にあり、ただアブラハムは、神さまの命じられた言葉を信じて、一歩一歩歩んだだけです。

アブラハムに求められたことはその一歩が忠実であることです。完全でなくても、誠実であり、謙虚であることです。アブラハムはその歩みを証しして、子孫に伝えました。神様はそれを用いて彼の子孫を祝福し彼らをも用いられました。

さらに、アブラハムは世界のことを知らなくても、世界よりはるかに広大な天地宇宙を見て祈っていました。世界はその中に含まれます。世界の始まりも終わりも、その中に含まれています。

アブラハムは、天地宇宙のなかでの人間の祝福を考えるように神さまは導かれたのではないでしょうか。

アブラハムが旅の途上で行った大切なことは礼拝です。石を積み上げて祭壇をつくり、献げものを献げて祈る素朴な礼拝でした。彼はどこへ行っても、礼拝をつづけました。さらに、その献げものとして　自分の最愛の息子イサクを献げよと神さまから命ぜられた時、それに従う姿勢を見せたことで、全き礼拝者とされました。

主キリストは、「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」（ヨハネ4：23）と言われましたが、アブラハムは霊と真理をもって礼拝した最初の人であることを証ししました。

アブラハムの信仰を受け継ぐことで、世界の民が一致するとき、人類は希望を見るのであります。

10代20代の生きづらさを抱える女の子の支援

特定非営利活動法人
BONDプロジェクト　水野ちひろ

BONDプロジェクトの活動

この活動は２００９年に始まり、生きづらさを抱えた10代20代の女の子たちに関わり続けている。

家庭の問題、虐待、性被害、希死念慮や貧困など様々な困難を抱えた若年女性たちにとってどのような支援が必要なのか、出会う女の子たちから話を聞き、何ができるかを考え、形を作りながら、そうした声や女の子たちを取り巻いている現状を届けるべきところに届けながら、ひたすらに突き進んできた。

現在では30名以上のスタッフが活動に関わるようになり、日々SNS相談やシェルターでの対応にあたり、女の子たちと関わっている。

BONDプロジェクトでは「長期にわたる包括的支援」として、女の子との出会いを求めるアウトリーチから、SNS、電話、対面による日々の相談、シェルターでの緊急一時保護や中長期的な自立支援など居場所での支援まで行っている。

コロナによる混乱が起きてからは、オンライン面談も始め、コロナ禍でさらに孤立を深めてしまっている女の子たちの居場所になれるよう、対面で相談ができる相談室も開設した。また、必要に応じて他機関との連携や専門機関、公的窓口への同行も行うが、コロナ禍では移動に制限がかかり、地方への出張ができず、全国から届く相談に対応しづらいという悩みを抱えた。そうしたことからも、全国の支援者と連携を取れるよう、ネットワーク作りにも取り組むようになった。

相談窓口を構えて待っているだけでは女の子たちとは出会えないので、週に1回以上は街に出向き、週に2回はネットパトロールを行い、気になる女の子たちに声をかけている。新宿歌舞伎町で出会ったある女の子は、涙を流しながらしゃがみ込み、つらそうな表情をしていた。幼い頃から「いらない存在」と親に言われ、暴力を受け、火傷や骨折などの怪我も負ってきていた。家にはほとんど帰らず、街頭に立ち、学校にも行けなくなり、お金を稼ぐために必死になる毎日の中で心身の不調をきたし、動けなくなってしまったのだと話してくれた。

つらさやしんどさを感じていても、どこかに相談をするにはエネルギーも決断力も必要になる。そんな状況で困っている、どうにかしたい、と思うのだが、様々なことが目まぐるしく起こる毎日への対処でいっぱいいっぱいになれば、相談どころでなくなってしまう。過去に児童相談所や警察が介入したこともあったが、そのときには体に傷がなかったために保護してもらえず、そうした経験も相談することを遠ざけているのではないかと感じる。

街に行けば同じように悩みや問題を抱えた仲間に出会い、女の子たちにとってそこが居場所になることもある。居場所と感じられる場所を持つことは生きるた

めに必要なことでもあるが、子どもたちだけでは困難を抱えきれなくなってしまったり、大人から搾取されたり、事件にも巻き込まれやすくなる。そのようなハイリスクな状況を放っておくこともできない。

パトロールで出会った女の子たちがすぐに私たちのところに連絡をくれるようにならなくても、まずは相談できる人がいることを知ってもらい、その子が必要とする時に相談できるところがあるという選択肢を増やしてほしいと思っている。

ネットパトロールでも同様に、何らかの問題を抱えながらも孤立した状態にある子たちを早期に見つけ、早期に関わりを作っていけるように、ハイリスクな書き込みをしている子たちに向けてBOND プロジェクトのSNS相談の情報を届けている。身近に頼れる人がおらず、年齢の低さや心身の不調などから、自分で生活していくための力を持ち合わせていない女の子たちにとっては、利用しやすい存在にもなっているSNS。

「#家出少女」「#泊めて」などと書き込めば、少女たちを狙う成人男性と思われる多数のアカウントから反応が届き、容易に見知らぬ人と繋がることができる。希死念慮や弱っているところにつけ込んで声をかけてくる場合もあり、事件やトラブルに発展するケースが後を絶たない。

コロナが流行し、「ステイホーム」が呼びかけられ、街中の居場所が次々と閉鎖されていく中、ますます居場所を失い、SNSに頼らざるを得なくなった女の子たちも多いのではないかと感じている。危ないかもしれないと思いながらも、社会的に孤立した状態にあるがために、そうするしかないと思ってしまう女の子もいるだろう。

居場所を求めてSNSで繋がった人に会い、そこで性被害にあったり怖い思いをしているような女の子たちに「とりあえずおいで」と言える居場所を作りたいと思っており、気持ちやこれからのことをゆっくり整理できるような、女の子たちの受け皿となれる居場所の必要性を絶えず感じている。

「怖い思いをするようなところにいなくていいよ。一度立ち止まって一緒に考えよう」そう女の子たちに伝えたい。

女の子たちのための居場所としては、「ボンドの家」というシェルターを運営しているが、シェルターとして機能しており、共同生活の場であるため、最低限のルールはあるものの、その他の部分については名前の通り普通の「家」に近い。

相談を寄せる女の子たちの中には施設というものに対しての抵抗を感じている子も多く、何か特別な事情がある子だと思われたくないという声も聞こえてくるため、入居しやすさや暮らしやすさを重視している。日替わりでスタッフが宿泊し、夕食と朝食の準備をし、毎日その日にあったことや悩んでいることを話す時間を作るようにしているが、ボンドの家に来てからも女の子たちには様々なトラブルが起こるため、スタッフは日々の様子を見守り、気にかけながら関わっている。安心できる場所に身を置いたからこそ不調がどっと出てきたり、深い傷つき体験からその後も続く不安定な状態のた

め、リストカットや薬の過剰摂取をしてしまったり、自分にとって安心安全でない人との関わりを作ってしまうこともある。もちろん一人ひとりそうした感情の表現の仕方も行動の仕方も違うのだが、何かが起きた時にはその都度女の子と話し合い、一緒に向き合って考えるようにしている。

元々は緊急的に短期間の居場所支援を行なう必要があったため、一時保護活動やシェルター運営に取り組んできた。

児童相談所などの公的機関に相談したくても対応してもらえるまでに時間がかかることが多く、夜間や土日など行政機関が閉まっている間も女の子たちが安全に過ごす場所がないため、すぐに受け入れられて、必要とする支援に繋がるまでの間過ごせる場所を作ってきた。今でもそうした機能はとても重要で、家出している女の子やハイリスクな状況にある子と出会った時には行政機関とも連携を取りながら対応しているが、アウトリーチをして居場所を求めている子たちとの繋がりを作っていくのであれば、受け入れられる居場所も整えておかなければならない。

公的支援の対象にはなりながらも、そうした支援には繋がりにくい女の子たちと多く関わってきているが、緊急一時保護から行政機関に同行しても、繋がったその先でもうまくマッチせず、支援を拒んだり、すぐに退所してしまう女の子もいる。住む場所も所持金もなく心身の不調もきたしており、とても困窮している状態で公的シェルターに入所した女の子でも、雰囲気や若者向けではない環境が合わず、「このままここにいては余計に体調が悪くなると思い〝脱走〟してきた」と突然本人から電話がかかってきたこともあった。それでも家に帰ることはできず、困っている状況に変わりはなく、公的支援に繋がりづらい女の子たちの中長期的な自立に向けた支援が必然となった。

ボンドの家では基本的に昼間は学校や仕事に行ける女の子の自立支援をしているが、自立を目指すとなっても、これまで家族関係に悩み、暴力や性的な被害も受けることがあるような環境にいた女の子たちにとって、自分で力をつけて次の一歩を踏み出すのは容易ではないと感じる。回復し、自立するまでにはとにかく時間と労力が必要になる。体調を調え、必要とする医療に繋がり、生活リズムや生活習慣を身に付けるなど、安定した日常生活を送っていくための基礎を獲得し、仕事や次に住む場所を見つけていけるといいのだが、取り組んでみたものの順応できずに体調を崩してしまったり、失敗を繰り返して自信を失ってしまうこともある。しかし、それでも諦めずにサポートし続けることで、自分で力を付けていく女の子たちを見てきた。

ボンドの家でトータル3年近く支援した女の子は、一度一人暮らしの練習ができるステップハウスに移動したが、一人でどう過ごしたらいいかがわからなく、眠れず、食事など自分の身の回りのこともできず、体調を崩してしまった。数ヶ月はステップハウスでの生活に挑戦してみたが、状態は変わらず、ボンドの家に戻ってくることになった。自分には一人

暮らしはできないのだと自信を失ってしまい、先が見えないような状況に女の子自身も不安を感じ、その子が回復していくためにどのような環境やサポートが必要なのか、私たちにも迷いや悩みが生じていた。

そこから1年半が経ち、紆余曲折はあったものの、BONDプロジェクトの他にも支援者の人たちとの関わりを作り、彼女は今再び一人暮らしを始めるために準備を進めている。以前とは違い、自分の力で行動している姿を見ると、随分強くなったように感じている。一進一退はありながらも、安全な環境で健康的な生活を送り、サポートしてくれる人との繋がりを作り、そうしたことを自分の経験として身に付け、女の子たちが少しずつでも自分の足で立つ力をつけていってほしいと思っている。

婦人保護施設との連携

女の子たちの自立に向けたサポートをしてくためには手厚いフォローが必要であるが、現状では支援できる人数も限られてしまう。ボンドの家は都内2箇所で運営しているが、それぞれ定員は2名である。SNS相談など気軽に相談できる間口は広がってきているが、受け入れる居場所を設け直接支援ができる支援団体は全国的にまだまだ不足している。様々な困難を抱え、居場所を失ってしまっている女の子たちのために、婦人保護施設との連携も欠かせない。BONDプロジェクトの活動が始まった当初から婦人保護施設に入ることができると良さそうな女の子たちと多数関わってきたが、入りたいと思っていても繋がることへのハードルが高く、なかなか入所にいたらなかったり、個人情報保護の観点から行政機関に繋がった後の女の子の状況を私たちが知ることができなかった。

２０１８年に東京都若年被害女性等支援モデル事業が開始され、東京都においては婦人相談員、女性相談センターとの連携も取りやすくなり、婦人保護施設に入所できる女の子も増えてきた。さらに、ボンドの家のような民間団体から直接婦人保護施設に入所できるための取り組みも始まり、今後も女の子たちが必要とする支援に繋がりやすくなっていくよう期待している。支援機関同士の連携が取りやすくなったことはとても大きな意味があり、それぞれの役割や立場で関わることができれば、選択肢も広げられる。

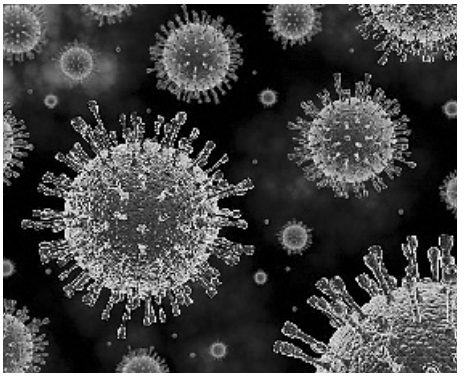
先日も婦人保護施設を訪れ、BONDから繋がった女の子に会うことができた。落ち着いた生活を送れていると聞くと、私たちも安心できると同時に、顔を見て本人から直接そうした話を聞けることや、日常的に婦人保護施設と行き来ができていることの大切さも感じる。婦人保護施設に入所はしていないが、もの作り作業やウォーキング、芋掘りイベントに参加させてもらった子もおり、ボンドの家だけではサポートしきれない部分もあるため、そうした交流ができることはとても有難いと思っている。

困難な問題を抱える女性への支援に関する法律が成立し、今後ますます変化していく時を迎えるが、地域ごとの形はあれど、ぜひ、東京都のように相談、支援しやすい取り組みが全国に広まってほしいと思う。

施設だより

Withコロナ こころとからだ

いずみ寮 看護師
高橋 真子



いずみ寮の職員となり、早10か月、コロナに振り回される時期にいずみ寮に入職し、福祉での仕事は初めてのことだらけで、毎日が追われるように過ぎていきます。

いずみ寮で暮らす利用者の方は様々な暴力を受け、普通では理解できないような傷つきを受けた方ばかりです。いずみ寮での生活で、やっと安心安全な居場所を得られたと同時に、共同生活でのひずみのようなものもあり、はじめは驚く事も多かったです。10か月経って、一人一人の個性を理解し、どうしたいのかご本人の意見を尊重しながら健康面でのフォローをしていく難しさを日々実感しています。

それに加え、新しい感染症コロナが猛威を振るい、マスク、手洗い、消毒、ソーシャルディスタンスなど多くの制限を強いられながらの生活です。コロナの陽性者が出るたびに、「施設でクラスターを出せない」と職員も看護師も必死に対応してきました。

ワクチンの効果やWithコロナという社会の流れもあり、今年度から、ソシオエステも再開しました。利用者の方も、3年ぶりに感染に気をつけながらもマッサージやネイルなどで、心も体も癒される時間を持つことが出来るようになりました。肌と心は密接な関係で、肌を通して心地よさが伝わると心も落ち着くということを利用者の方を見て実感しています。

薬での治療もとても重要ですが、心地いいと感じる心をもてるようになることもとても大切な事だと思います。

医療はものすごい勢いで進歩していますが、普段の生活の中でお腹が痛い時に手で腹部を撫でる、不安な時に手を握って気持ちを落ち着かせるなど、何気に体のどこかに手を当てて自分自身を癒していることは多いものです。

なぜ手で肌や体に触れると痛みが和らいだり、心が穏やかになるのでしょうか？

その理由の一つとして挙げられるのが【絆ホルモン】【幸せホルモン】と呼ばれる3つのホルモンの存在です。

その一つはオキシトシンです。オキシトシンは安らぎを与える幸せホルモンといわれています。オキシトシンは人の脳で合成され、分泌される物質で、愛情がこもった皮膚刺激で安らぎを与え、ストレスを緩和する、人との信頼関係を築く

など様々な社会行動と関わっていると考えられています。オキシトシンはスキンシップで分泌されるといわれています。（一説にはオキシトシンは動物の愛着行動を促進するというエビデンスはあっても人間については根拠がないともいわれていますが、幸せホルモンの可能性はあるといわれているものです）

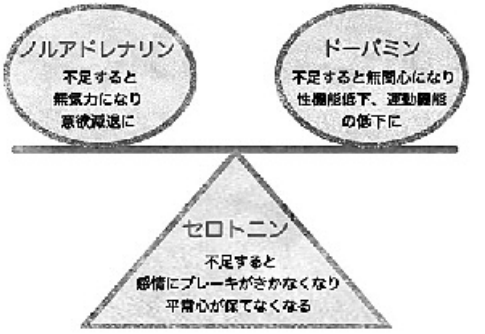
次にセロトニンという自律神経を整える神経伝達物質です。セロトニンがしっかり分泌されていると交感神経と副交感神経のバランスが整い、精神が安定します。セロトニンを増やすにはバランスのとれた食事と適度な運動が必要と言われています。セロトニンのほとんどが腸で作られているため、セロトニンを増やすには腸内環境を整えることが大切になってきます。発酵食品や食物繊維を積極的に摂取することがすすめられています。

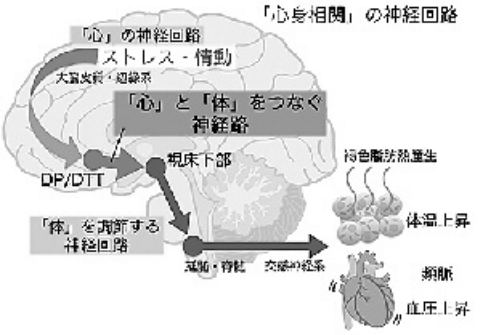
最後にやる気が出せるドーパミンです。ドーパミンは生きるために必要なやる気を促し、幸福感をアップさせます。ドーパミンが不足すると、やる気が起きない・記憶力や作業効率の低下・無関心や無感動などを引き起こし幸福感の低下につながります。ドーパミンを多く含んだ食品（乳製品や大豆食品）はドーパミンを増やすと言われています。

このように、こころとからだの健康には日々の食事や運動も大きくかかわってきます。

東洋医学では、【身体（肉体）】と【心（精神）】を別の物とは考えず、相互に作用しているものとして捉えています。また、（感情）と（臓器）と（器官）との関係も密接であると考えられています。いずみ寮を利用されている方をみていると、心と体（感情・臓器・器官）が複雑にからまり合いながらいろんな症状が出ていることを目の当たりにします。

支援員や心理職、栄養士、看護師、ほかソシオエステの講師や宿直専門員、ボランティアの方々が毎日精いっぱい関わっていても目に見えて良い方向に向かうことは少なく、長い時間が必要です。日々の暮らしを大切にしながら、おひとりおひとりのペースでゆっくりと前に向けて進んでいけるといいなと思っています。





ゆくすえ

シュヴェスターからひとこと

人生百年長寿社会が多くのことを考えさせてくれます。太平洋戦争をくぐりぬけきびしい生活を荷った時代があります。多くの高齢者が全力で積み上げたものは何なの・・・?と考えています。

私は身体のトラブルで自力での行動が出来にくいこの頃、辛いことに直面すると心が重くなってしまい、元気だった楽しい時の事を思い、慰められています。

細井　陽子

＊

私は元気にしております。

法人の記念誌が発刊され、とても良いのが出来て、嬉しいです。

眞山　知恵子

いよいよ「かにた婦人の村・居住棟建替え」が現実的になってきました。莫大な自己資金を集めるための「建替資金寄付のお願い」に、なんと多くの方々が応じてくださっていることか。感謝に堪えません。

皆さまの「かにた」への熱い思いと祈りに、緊張感を抱きます。現在の、そして今後の村の全てをもって応えていかなければならないと、痛感しています。

天羽　道子

＊

終戦日平和の祈り永遠(とこしえ)に

血圧計る秋の朝(あした)の雲白し

惜しまるる「英女王の死」秋深む

逝く秋や新型コロナさまよへる

夢ゆえの夢描きたし秋の空

植木　道子

10月19日、シュヴェスター道と、相浜ガーデンに桜庭歌子姉と小川都代姉を訪問し、記念誌をお届けしました。

コロナ禍の中ですが、幸運なことにN95のマスクをつけることを条件に、30分限定で面会ができ、シュヴェスター歌子のお部屋で楽しいひとときを過ごすことができました。

お二人ともお元気で、お持ちした記念誌のなつかしい写真に、ページを繰りながら話がはずみました。

相浜ガーデンのスタッフの方が、東京でのヘルパー時代、受け持ち区域が上富坂教会周辺だったとのことで、シュヴェスター都代が、とても喜ばれていました。

（報告・塩川　成子）

賛助金・寄付金
ありがとうございました。

臨時寄附・賛助会費

赤石二三子、浅野康子、石塚久江・八重、伊藤瑞男、伊藤隆史、今井佳代、鵜崎明日香、大曽根聡子、大沼昭彦、大浜亜紀、岡田元子、カールソンけい子、加藤順、加藤誠、金室武子、工藤和恵、桑原亜子、桑山善右衛門、小島桂子、後藤信子、小林充子、斎藤仁一、酒井忍、坂本健、佐藤聡美、重松啓三郎、柴山操、渋谷弥一、但野明子、坪野吉孝・あや、中平安子、中山勝也、長谷川寿美子、畠山重信、平手光明、平山嘉繁、福本和代、古田土直寿、堀越教子、松下光雄、村田充子、山田真規子、吉田やす子、渡辺きぬよ、久保木知子、日本基督教団牛込払方町教会山ノ下恭二牧師、同西静分区教会婦人会八幡美智子、学校法人明治学院中学校東村山高等学校、

かにた婦人の村建替え寄附

縣洋一、赤山孝子、明星晃、浅野康子、荒川恵美子、山泰子、五十嵐敏子、池田直子、石井佐・理子、石垣茂夫、市橋みはる、今井佳代、植木道子、大澤秀夫・真理子、大沼祐太、大浜亜紀、大柳龍一郎、岡崎信治、岡田元子、小川幸子、小口晃生、奥村益良、鹿島信義、加藤大、鎌田仁美、木下未果子、工藤和恵、小池タエ、小久保正、古仲 邦子、小林充子、近藤浩子、坂口節子、坂本順子、佐賀昭子、佐々木清、佐藤千郎・充子、篠川栄一、清水正雄、神代眞砂実、菅野百合子、関本郁子、高橋幸子、高橋路子、田澤文雄、立野陽、筒井祥博、坪野吉孝、戸村幸子、中村秀一、中山勝也、畑和雄、畠山重信、母の家ベテル、早田泰恵、平山嘉繁、深谷美歌子、福本和代、藤田純子、古田土直寿、堀越教子、松下光雄、三浦恒美、三上典男、三吉信彦、村田充子、村松一恵、村松芳江、望月栄一、森史子、八重樫眞理子、山田篤子、山田真規子、横田碩子、吉田やす子、渡辺きぬよ、日本基督教団 芦屋三条教会、同柏崎伝道所、同君津伝道所、同金城教会、同久喜復活伝道所、同畦野教会、同泉北栂教会 重岡奈津子、同市川三本松教会、同岩見沢教会、同小郡教会、同勝田台教会、同田浦教会エレミヤ会 森戸隆夫、同高砂教会、同千葉本町教会、同東海教会 和田芳子、同相模原教会、同土気あすみが丘教会、同富里教会、同長浦教会、同名古屋中村教会、同成瀬が丘教会、同飛騨高山教会、同深川教会、同武蔵野教会、同鹿屋伝道所 野元美佐子、牧ノ原やまばと学園 理事長 長澤道子、ミッドナイトミッションのぞみ会 理事長 木下宣世

（敬称略 以上本部扱い）

臨時寄付

西辻郁之、武藤信子（以上姉妹会扱い）

7月1日～10月26日分

かにた婦人の村の施設建替え事業（今年度と来年度二か年計画）の実施に備え、日々ご支援くださるディアコニア読者・日々の聖句愛読者、かにた後援会、日本基督教団関係諸教会・諸施設・学校、キリスト教社会事業同盟会員・関係者のみなさまに「建て替え資金ご寄付のお願い」をお送りしましたところ、多くの方々からご寄付をお送り頂きました。心から感謝申し上げます。建替え事業が神様のご計画通りに進みますよう皆様とお祈りしていきたいと思います。

（理事長・大沼）

おしらせ

★訃報

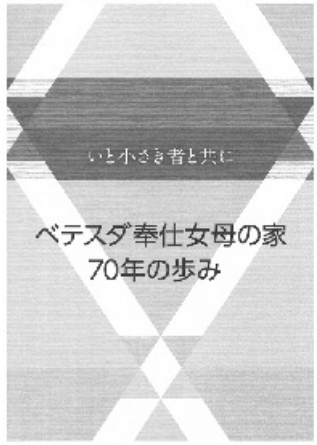
みんなの祈りの友　黒木八重子姉が、
6月30日に召天されました。
元法人理事　坂口順治兄が、
7月8日に召天されました。
故藤巻三郎牧師夫人　藤巻恵子姉が、
7月30日に召天されました。
長い間のお支えを心から感謝し、ご家族の方々の上に天父の深い慰めと平安をお祈りいたします。

★理事会報告

第240回　8月16日決議の省略による議決
【審議】第一号 婦人保護施設いずみ寮空調設備工事入札の件
第二号2022年度第一次補正予算の件
理事・監事全員の賛成に原案通り議決。
第241回　9月1日　テレビ会議と併用
【報告】第一号 業務執行理事報告の件
【審議】第一号いずみ寮空調設備工事指名業者選定の件
第二号いずみ寮空調設備工事仕様書の件
理事・監事全員の賛成に原案通り議決。

★法人の記念誌

「ベテスダ奉仕女母の家70年の歩み ―いと小さき者と共に―」を刊行



ベテスダ奉仕女母の家は2024年に創立70周年を迎えます。この間にはさまざまなことがあり、歴史をまとめるのは簡単なことではありませんが、記録として残し伝えていきたい歩み、基本精神、かかわってきた人々の思いなどを、このたび一冊にまとめました。
「上富坂だより」「ディアコニ」のバックナンバーを丹念に読込み、ひもといていく時間は、宝物を掘り起こす貴重な時間でした。
（塩川 成子）

★速報

11月4日、「木造先導・優良木造プロジェクト2022」の7、130万円の補助金が採択されたとの知らせが、国交省より届きました。感謝です！

第242回　9月21日　テレビ会議と併用
【報告】第一号いずみ寮空調設備工事入札結果について
【審議】第一号いずみ寮空調設備工事落札業者決定の件
第二号 いずみ寮空調設備工事契約の件
理事・監事全員の賛成に原案通り議決。

2022年11月15日発行（年3回）
発行人　大沼昭彦
編集人　村田英彦
印刷所　㈱印刷センター
発行所
〒178-0061
東京都練馬区大泉学園町7-17-30
社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家
電話　03-3924-2238
https://www.bethesda-dmh.org/
振替口座 00190-2-138164